

## 第67回 東海財界俱楽部例会



名古屋芸術大学学長 來住尚彦氏

### 今年最後の東海財界俱楽部例会を開催

中部財界フォーラム社の異業種交流会「第67回東海財界俱楽部」の年内最後の例会が11月27日、名古屋市中区丸の内のアイリス愛知12階のグランシャリオで開催された。この日、來住尚彦（きし・なおひこ）・名古屋芸術大学学長が講師を務め、「エコノミーとアカデミー」の演題で、教育と経済の関係などについて、ユニークな持論を展開した。來住学長はマイクを使わず、時折、会場内を歩きながら参加者に問いかけるなど、さながら大学の講義のような対話に、企業経営者ら約30人が熱心に聞き入った。

來住学長は冒頭、種子島の高校で講演したことに触れ、偏差値が高いとは言えない高校だが、島内には学力が違う子供が一緒に学んでいて、卒業したら何をするのか、いわばアカデミーとエコノミーを日々考えていた。10年後の島をどうするか、決めようと生徒に語り掛け、そのためには様々な情報を集めなければならない、と話した。そして『美しいものは最後に勝つ』と自分の中に美しさの基準を持つことが大切、と訴えた。

來住学長は自身の異色ともいえる経歴を披露。早稲田大学理工学部を卒業後TBSに入社。音声エンジニアだったが、番組ディレクターになりたいと上司に交渉し、ラジオのベストテンといわれる音楽番組を制作に携わった。ジャニーズの歌手らと接触し、タレントマネージメントが分かるようになったという。15歳の少年が5年後、10年後にどうなっているか、を考えて、タレントの能力を引き出す。エンタテインメントで人を集めないと、複合施設「赤坂サカス」を立ち上げた。当初1日2万人だった最寄り駅の利用客が9万人に増えたが「共通言語を決めれば、人もお金も集まり、社会を回す力になることを実感しました」と述べた。その後、環境省、文化庁などの委員などを務め、2024年に名古屋芸術大学に招聘され、学長に就任した経緯を説明した。

経済の本質は価値と価格が両輪として、美しい器が売れるとした千利休を例に挙げつつ、「エコノミーは価値の循環、経済価値につながり、これが社会を動かす。金を残して死するは下、仕事を残して死するは中、人を残して死す

るは上、という言葉があるが、学長としての仕事は人を残すことだと思います」と語った。アカデミーにはゼロから創り上げる喜びがあり、文化の創造拠点にすることが未来への役割であり、知の創造と人の育成、学びが社会を変える、と説明。その上で、エコノミーとアカデミーの融合がすなわち「学」であり、「経済」である、とした。

來住学長は最後に、人生の折り返し地点で気づいたことについて、参加者にも問いかけながら、進行。「人生は生と死の間に何をするか、です。私は折り返しで、人生を練り直したい。自分の目標は何か、こうすればいいことに自分は10年かかったとすれば、それを後輩に伝えれば、3年でできるようになるでしょう。今私たちはものすごい情報量の中にいます。私たちには1日分ほどの情報は平安、室町時代の人の一生分でしょう。AI（人工知能）やアルゴリズム（問題解決のための手順、計算方法）は知識であっても、教養ではありません。難しいことを簡単に説明するのが『美しい』ことだと思います」と『美しさ』が大切、との持論で講演を締めくくった。

この後、丹羽司一・学校法人佑愛学園理事長の発声で乾杯、講師を囲んで交流し、親睦を深めた。



來住学長の講演に聞き入る参加者